

開催地名：茨城県牛久市	
開催日時	令和元年 12 月 20 日（金） 15：00 ～ 17：00
開催場所	牛久市保健センター
語り部	武藏野 美和（岩手県陸前高田市）
参加者	牛久市防災会 約 80 名
開催経緯	牛久市では、大規模災害の経験が少なく、「自分の身は自分で守る」といった意識も低い。自主防災組織の結成率は、人口ベースで約 84 パーセントにとどまっている。また、自主防災組織を結成していても、ほとんど活動していない組織も見受けられる状況である。今回語り部の講演会を開催して、防災意識の向上の一助としたい。
内容	<p>（１）陸前高田市の被害状況</p> <p>三陸沿岸地域は過去にも大きな津波被害に遭ってきた。明治 29 年の明治三陸大津波、昭和 8 年の昭和三陸大津波、そして昭和 35 年のチリ地震に伴う遠地津波と、約 110 年の間に 3 度も大きな被害に遭っており、その度に新しい対策を打ってきたにもかかわらず、今回の東日本大震災では、またも多くの犠牲者が出てしまった。人口 24,246 名のうち、死者・行方不明者は 1,757 名にのぼり、全壊家屋は市全体世帯の 40 パーセント強で、これらの被害のほとんど全てが津波がもたらしたものであった。</p> <p>（２）避難の明暗を分けたもの</p> <p>前項で出てきた、市の施設と呼ばれていたものは、3 度の津波被害の教訓が生かされず、高台には作られなかった。利用の便の良さのみを追求し、津波の想定を結局はほぼ考慮に入れずに、海の高さとほぼ同じくらいの平野部に作られてしまったが故に、被害の拡大を招いてしまった。あわせて、チリ地震後に、やはり地震の影響で出された津波警報が、想定されているよりも低い高さでしか襲来しなかったことも相まって、「どうせ津波はまた来ない」、「逃げなくても大丈夫」等と判断して、直ちに逃げなかった方々の多くが犠牲となってしまった。</p> <p>一方で、津波の到達の速さ、高さを想定して避難した方々は、ひたすら高いところを目指して避難をし、難を逃れて助かっているという事実もあった。</p> <p>以下助かった例と、犠牲になってしまった例をあげる。</p> <p>① 助かった例</p> <p>市内の信用金庫の話。支店長は隣の気仙沼の出身で幾度も津波被害を経験されている方。発災直後、支店長から、「必ず大きな津波が押し寄せるので、仕事はもう気にしなくていい、何も持たないで良い、すぐに歩いて高台の高田</p>

第一中学校まで歩いて逃げなさい」と指示があり、それに対して、行員たちは「なんで寒いのに歩いて逃げないといけないの」と文句を言いながらも歩いて避難所にたどり着いた。その直後、まさに津波がガレキを巻き込んですぐ目の前まで襲来しているのを目にした。ここに勤めていた行員たちは誰ひとりとして命を落とすことは無かった。

② 犠牲になってしまった例

同じく市内にある郵便局の話。地震がおさまった直後、「来局するお客様がいるはずだから、後片付けを直ちに行い、すぐに再開できるようにしておくよ」と上司が指示をした。その上司には先程の信用金庫の支店長とは異なり、津波が必ず来るという意識が全くなく、後片付けの最中に津波に飲み込まれ、郵便局で働いていた方々ほぼ全員が帰らぬ人となってしまった。

(3) 災害は必ず起こりうる

自分の住む地域の災害リスクを知ることや、過去に受けた災害について知ることは必要である。また、以前の津波はここまでは来なかったから大丈夫とか、まさかここまでは水は来ないとか、自分に都合の良い判断はせずに、常に想定外を想定することが必要である。

そして、家族で落ち合う場所を確認しておくことや、自助としての避難グッズを準備しておくこともおすすめしたい。守りたい人がいるならまず自分の身の安全を確保することを意識していただき、救助される側から救助する側になれるよう意識した準備を行っていただけたら幸いである。



開催地より

遠野市の後方支援活動についてわかりやすくお話していただいた。また、避難所運営のポイントについても伺うことができた。本日の講演を今後の防災活動に活かしていきたいと思う。